

茨海小学校

宮沢賢治

私が茨海ばらうみの野原に行ったのは、火山弾かざんだんの手頃てころな標本を採るためと、それから、あそこに野生の浜茄はまなすが生えているという噂うわさを、確かめるためとでした。浜茄はご承知のとおり、海岸に生える植物です。それが、あんな、海から三十里もある山脈へだを隔てた野原などに生えるのは、おかしいとみんな云いうのです。ある人は、新聞に三つの理由をあげて、あの茨海の野原は、すぐ先頃せんころまで海だったということを論じました。それは第一に、その茨海という名前、第二に浜茄の生えていること、第三にあすこの土を嘗なめてみると、たしかに少ししおから鹹しおいような気がすること、とこう云うのですけれど

ども、私はそんなことはどれも証拠しやうこにならないと思  
います。

ところが私は、浜茄をとうとう見附みけませんでした。  
尤もつとも私が見附けなかつたからと云つて、浜茄があす  
こにないというわけには行きません。もし反対に一本  
でも私に見当つたら、それはあるということの証拠に  
はなりましょう。ですからやつぱりわからないのです。

火山弾の方は、はじめが少し潰つぶれてはいましたが、半  
日かかってとにかく一つ見附けました。

見附けたのですが、それはつい寄附させられてし  
まいました。誰たれに寄附させられたのかつていうんです

か。誰について校長にですよ。どこの学校？ ええ、どこの学校って正直に云っちゃいますとね、茨海狐きつね小学校です。愕おどろいてはいけません。実は茨海狐小学校をそのひるすぎすつかり参観して来たのです。そんなに変な顔をしなくてもいいのです。狐にだまされたのとはちがいます。狐にだまされたのなら狐が狐に見えないで女とか坊ぼうさんとかに見えるのでしよう。ところが私のはちやんと狐を狐に見たのです。狐を狐に見たのが若もしだまされたものならば人を人に見るのも人にだまされたという訳です。

ただ少しおかしいことは人なら小学校もいいけれど

狐はどうだろうということですがそれだつてあんまりさしつかえありません。まあも少しあとを聞いてごらんなさい。大丈夫だいじょうぶ狐小学校があるということがわかりますから。ただ呉くれ呉くれも云つて置きますが狐小学校があるといつてもそれはみんな私の頭の中にあつたと云うので決して偽うそではないのです。偽でない証拠にはちやんと私がそれを云つているのです。もしみなさんがこれを聞いてその通り考えれば狐小学校はまたあなたにもあるのです。私は時々こ斯う云う勝手な野原をひとりで勝手にあるきます。けれども斯う云う旅行をするとあとで大へんつかれます。殊ことにも算術などが大へ

ん下手になるのです。ですから斯う云う旅行のはなしを聞くことはみなさんにも決して差支さしつかえありませんがあんまり度々たびたびうっかり出かけることはいけません。

まあお話をつづけましょう。なあにほんとうはあの茨いばらやすすきの一杯いっぱい生えた野原の中で浜茄などをさがすよりは、初めから狐小学校を参観した方がずうつとよかつたのです。朝の一時間目からみていた方が参考にもなり、又面白またおもしろかつたのです。私のみたのは今も云いました通り、午后ごごの授業です。一時から二時までの間の第五時間目です。なかなか狐の小学生には、しつかりした所がありますよ。五時間目だって、一人も厭あ

きてるものがないんです。参観のもようを、詳しくお話ししましょうか。きつとあなたにも、大へん参考になります。

浜茄は見附からず、小さな火山弾を一つ採って、私は草に座すわりました。空がきらきらの白いうろこ雲で一杯でした。茨には青い実がたくさんつき、萱かやはもうそろそろ穂ほを出しかけていました。太陽が丁度空の高い処ところにかかつていましたから、もうおひるだということとがわかりました。又じっさいお腹なかも空すいていました。そこで私は持つて行ったパンの袋ふくろを背囊はいのうから出して、すぐ喰たべようと思いました。急に水がほしくなりまし

た。今まで歩いたところには、一とこだつて流れも泉もありませんでしたが、もしかもし向うへ行つたら、とにかく小さな流れにでもぶつつかるかも知れないと考へて、私は背囊の中に火山弾を入れて、面倒くさいのでかけ金もかけず、締革しめかわをぶらさげたまませなかにしよい、パンの袋だけ手にもつて、又ぶらぶらと向うへ歩いて行きました。

何べんもばらがかきねのようになつた所を抜ぬけたり、すすきが栽うえ込みこみのように見える間を通つたりして、私は歩きつづけましたが、野原はやっぱり今まで通り、小流れなどはなかつたのです。もう仕方ない、この辺



でパンをたべてしまおうと立ちどまったとき、私はずうっと向うの方で、ベルの鳴る音を聞きました。それはどこの学校でも鳴らすベルの音のようで、空のあの白いうろこ雲まで響ひびいていたのです。この野原には、学校なんかあるわけはなし、これはきつと俄にわかに立ちどまった為ために、私の頭がしいんと鳴ったのだと考えても見ましたが、どうしても心からさつき音を疑うわけには行きませんでした。それどころじゃない、こんどは私は、子供らのがやがや云う声を聞きました。それは少しの風のために、ふつとはつきりして来たり、又俄かに遠くなったりしました。けれどもいかにも

無邪気むじやきな子供らしい声が、呼んだり答えたり、勝手にひとり叫さけんだり、わあと笑ったり、その間には太い底力のある大人の声もまじって聞えて来たのです。いかにも何か面白そうなのです。たまらなくなつて、私はそつちへ走りました。さるとりいばらにひっかけられたり、窪くぼみにどんと足を踏ふみこんだりしながらも、一生けん命そつちへ走つて行きました。

すると野原は、だんだん茨が少なくなつて、あのすずめのかたびらという、一尺ぐらいのけむりのような穂を出す草があるでしょう、あれがたいへん多くなつたのです。私はどしどしその上をかけました。そしたら

どう云うわけか俄かに私は棒か何かで足をすくわれたらしくどたつと草に倒たおれました。急いで起きあがって見ますと、私の足はその草のくしやくしやもつれた穂にからまつているのです。私はにが笑いをしながら起きあがって又走りました。又ぼったりと倒れました。おかしいと思つてよく見ましたら、そのすずめのかたびらの穂は、ただくしやくしやにもつれているのじやなくて、ちやんと両方から門のように結んであるのです。一種のわなです。その辺を見ますと実にそいつが沢山たくさんつくつてあるのです。私はそこでよほど注意して又歩き出しました。なるべく足を横に引きずらず抜き

さしするような工合くあいにしてそつと歩きましたけれども  
まだ二十歩も行かないうちに、又ばったりと倒されて  
しまいました。それと一緒にいっしょに、向うの方で、どつと笑  
い声がり、それからわあわあはやすのです。白や茶  
いろや、狐の子どもらがチョツキだけを着たり半ズボ  
ンだけはいたり、たくさんたくさんこつちを見てはや  
しているのです。首を横にまげて笑っている子、口を  
尖とがらせてだまつている子、口をあけてそらを向いては  
あはあはあはあ云う子、はねあがってはねあがって叫  
んでいる子、白や茶いろやたくさんいます。ああこれ  
はどうとう狐小学校に来てしまった、いつかどこかで

誰かに聴いた茨海狐小学校へ来てしまったと、私は  
まっ赤になつて起きあがつて、からだをさすりながら  
考えました。その時いきなり、狐の生徒らはしいんと  
なりました。黒のフロックを着た先生が尖つた茶いろ  
の口を閉じるでもなし開くでもなし、眼をじつと据え  
て、しずかにやって来るのです。先生と云つたつて、  
勿論狐の先生です。耳の尖つていたことが今でもはつ  
きり私の目に残っています。俄かに先生はぴたりと立  
ちどまりました。

「お前たちは、又わなをこしらえたな。そんなことを  
して、折角おいでになつたお客さまに、もしものこと

があつたらどうする。学校の名譽めいよに関するよ。今日はもうお前たちみんな罰ばつしなければならぬ。」

狐の生徒らはみんな耳を伏ふせたり両手を頭にあげたりしよんぼりうなだれました。先生は私の方へやって来ました。

「ご参観でいらつしやいますか。」

私はどうせ序ついでだ、どうなるものか参観したいと云つてやろう、今日は日曜なんだけれども、さつきベルも鳴つたし、どうせ狐のことだからまたいい加減の規則もあつて、休みだというわけでもないだろうと、ひとりで勝手に考えました。

「ええ、ぜひそう願いたいのです。」

「ご紹介しょうかいはありますか。」

私はふと、いつか幼年画報に出ていたたけしという人の狐小学校のスケッチを思い出しました。

「画家のたけしさんです。」

「紹介状はお持ちですか。」

「紹介状はありませんがたけしさんは今はずいぶん偉えらいですよ。美術学院の会員ですよ。」

狐の先生はいけませんというように手をふりました。

「とにかく、紹介状はお持ちにならないですね。」

「持ちません。」

「よろしゅうございます。こちらへお出いで下さい。ただ今丁度ひるのやすみでございますが、午后の課業をご案内いたします。」

私は先生の狐について行きました。生徒らは小さくなって、私を見送りました。みんなで五十人は居たでしょう。私たちが過ぎてから、みんなそろそろ立ちあがりました。

先生はふつとうしろを振りかふえりました。そして強く命令しました。

「わなをみんな解け。こんなことをして学校の名誉に関するじゃないか。今に主謀者しゅぼうしやは処罰するぞ。」



生徒たちはくるくるはねまわってその草わなをみんなほどこいて居おりました。

私は向うに、七尺ばかりの高さのきれいな野ばらの垣根かきねを見ました。垣根の長さは十二間はたしかにあつたでしょう。そのまん中に入り口があつて、中は一段高くなっていました。私は全くそれを垣根だと思つていたのです。ところが先生が

「さあ、どうかお入り下さい。」と叮寧ていねいに云うものですから、その通り一足中へはいりましたら、全く愕おどろいてしまいました。そこは玄関げんかんだったのです。中はきれいに刈かり込んだみじかい芝生しばいになつていてのばらでいろ

いろしきりがこさえてありました。それに靴ぬぎくつもあれば革かわのスリッパもそろえてあり馬の尾を集めてこさえた払子ほっすもちやんとぶらさがっていました。すぐ上り口に校長室と白い字で書いた黒札くろふだのさがったばらで仕切られた室へやがありそれから廊下ろうかもあります。教員室や教室やみんなばらの木できれいにしきられていました。みんな私たちの小学校と同じです。ただちがうところは教室にも廊下にも窓のないことそれから屋根のないことです。これは元来屋根がなければ窓はいらない筈はずですからおまけに室の上を白い雲が光って行ったりしますから、実に便利だろうと思いました。校長室の

中では、白服の人の動いているのがちらちら見えます。エヘンエヘンと云っているのも聞えます。私はきよろきよろあちこち見まわしていましたら、先生が少し笑って云いました。

「どうぞスリッパをお召しなすつて。只今校長に申しますから。」

私はそこで、長靴をぬいで、スリッパをはき、背囊をおろして手にもちました。その間に先生は校長室へ入って行きましたが、間もなく校長と二人で出て来ました。校長は瘠せた白い狐で涼しそうな麻のつめえりでした。もちろん狐の洋服ですからさぼんには尻尾を

入れる袋もついてあります。仕立賃も廉くはないと私は思いました。そして大きな近眼鏡をかけその向うの眼はまるで黄金いろでした。じつと私を見つめました。それから急いで云いました。

「ようこそいらつしやいました。さあさあ、どうぞお入り下さい。運動場で生徒が大へん失礼なことをしましたそうで。さあさあ、どうぞお入り下さい。どうぞお入り。」

私は校長について、校長室へ入りました。その立派なこと。卓の上には地球儀ちきゅうぎが置いてありましたしうるのガラス戸棚とだなにはにわとり鶏の骨格やそれからいろいろの

わなの標本、剥製はくせいの狼おおかみや、さまぎまの鉄砲てっぽうの上手に泥どろでこしらえた模型、獵師りようしのかぶるみの帽子ぼうし、烏打帽から何から何まですべて狐の初等教育に必要なくらいのはみんな備えつけられていました。私は眼を円くして、ここでもきよろきよろするより仕方ありませんでした。そのうち校長はお茶を注ついで私に出しました。見ると紅茶です。ミルクも入れてあるらしいのです。私はすっかり度胆せいかんをぬかれました。

「さあどうか、お掛かけ下さい。」

私はこしかけました。

「ええと、失礼ですがお職業はやはり学事の方です

か。」校長がたずねました。

「ええ、農学校の教師です。」

「本日はおやすみでいらつしやいますか。」

「はあ、日曜です。」

「なるほどあなたの方では太陽曆れきをお使いになる関係上、日曜日がお休みですな。」

私は一寸ちよつと変な気がしました。

「そうするとおうちの方ではどうなるのですか。」

狐の校長さんは青く光るそらの一ところを見あげて  
しずかに鬚ひげをひねりながら答えました。

「左様さよう、左様、至極しじくご尤もつともなご質問です。私の方は太

陰曆を使う関係上、月曜日が休みです。」

私はすっかり感心しました、この調子ではこの学校は、よほど程度が高いにちがいない、事によると狐の方では、学校は小学校と大学校の二つきりで、或はあるいこの茨海小学校は、中学五年程度まで教えるんじゃないかと気がつきましたので、急いでたずねました。

「いかがですか。こちらの方では大学校へ進む生徒は、ずいぶん沢山あまございますか。」

校長さんが得意そうにまるで見当ちが違がいの上の方を見ながら答えました。

「へい。実は本年は不思議に実業志望が多あまございました

て、十三人の卒業生中、十二人まで郷里きょうりに帰って勤勞に従事いたして居ります。ただ一人だけ大谷地おおやち大学の入学試験を受けまして、それがいかにもうまく通りましたので、へい。」

全く私の予想通りでした。

そこへ隣となりの教員室から、黒いチョッキだけ着た、がさがさした茶いろの狐の先生が入って来て私に一礼して云いいました。

「武田金一郎をどう処罰いたしましょう。」

校長は徐おもむろにそちらを向いてそれから私を見ました。



「こちらは第三学年の担任です。このお方は麻生あそう農学校の先生です。」

私はちよつと礼をしました。

「で武田金一郎をどう処罰したらいいかというのだね。お客さまの前だけれども一寸呼んでおいで。」

三学年担任の茶いろの狐の先生は、恭うやうやしく礼をして出て行きました。間もなく青い格子こうしじま縞の短い上着を着た狐の生徒が、今の先生のうしろについてすごすごと入って参りました。

校長は鷹揚おうようにめがねを外はずしました。そしてその武田金一郎という狐の生徒をじつとしばらくの間見てから

云いました。

「お前があのだらなを運動場にかけるようにみんなに云いつけたんだね。」

武田金一郎はしやんとして返事しました。

「そうです。」

「あんなこととして悪いと思わないか。」

「今は悪いと思います。けれどもかける時は悪いと思いませんでした。」

「どうして悪いと思わなかった。」

「お客さんを倒たおそうと思ったのじゃなかったからです。」

「どういう考かんがえでかけたのだ。」

「みんなで障碍物しょうがいぶつ競争をやろうと思ったんです。」

「あのわなをかけることを、学校では禁じているのだが、お前はそれを忘れていたのか。」

「覚えていました。」

「そんならどうしてそんなことをしたのだ。こう云う工合ぐあいにお客さまが度々たびたびおいでになる。それに運動場の入口に、あんなものをこしらえて置いて、もしお客さまに万一のことがあつたらどうするのだ。お前は学校で禁じているのを覚えていながら、それをするというのはどう云うわけだ。」

「わかりません。」

「わからないだろう。ほんとうはわからないもんだ。それはまあそれでよろしい。お前たちはこのお方がそのわなにつまずいて、お倒れなされたときはやしたそうだが、又私もここで聞いていたが、どうしてそんなことをしたか。」

「わかりません。」

「わからないだろう。全くわからないもんだ。わかつたらまさかお前たちはそんなことしないだろうな。では今日の所は、私からよくお客さまにお詫わびを申しあげて置くから、これからよく気をつけなくちゃいけない

よ。いいか。もう決して学校で禁じてあることをしてはならんぞ。」

「はい、わかりました。」

「では帰って遊んでよろしい。」校長さんは今度は私に向きました。担任の先生はきちんとまだ立っていません。

「只今ただいまのようなわけで、至むじやきつて無邪気なので、決して悪気があつて笑つたりしたのではないようでございますから、どうかおゆるしをねがいとう存じます。」

私はもちろんすぐ云いました。

「どう致いたしまして。私こそいきなりおうちの運動場へ

飛び込んで来て、いろいろ失礼を致しました。生徒さん方に笑われるのなら却って私は嬉しい位です。」

校長さんは眼鏡を拭いてかけました。

「いや、ありがとうございます。おい武村君。君からもお礼を申しあげてくれ。」

三年担任の武村先生も一寸私に頭を下げ、それから校長に会釈して教員室の方へ出て行きました。

校長さんの狐は下を向いて二三度くんくん云つてから、新らしく紅茶を私に注いでくれました。そのときベルが鳴りました。午後の課業のはじまる十分前だったのでしよう。校長さんが向うの黒塗りの時間表

を見ながら云いました。

「午後は第一学年は修身と護身、第二学年は狩猟術、第三学年は食品化学と、こうなっていますがいずれもご参観になりますか。」

「さあみんな拝見いたしたいです。たいへん面白そう  
おもしろ  
です。今朝からあがらなかったのが本当に残念です。」

「いや、いずれ又おいでを願いましよう。」

「護身というのは修身といっしょになっているのですか。」

「ええ昨年までは別々でやりましたが、却って結果がよくないようです。」

「なるほどそれに狩猟だなんて、ずいぶん高尚こうしような学  
科もおやりですな。私の方ではまあ高等専門学校や大  
学の林科にそれがあるだけです。」

「ははん、なるほど。けれどもあなたの方の狩猟と、  
私の方の狩猟とは、内容はまるでちがっていますから  
な、ははん。あなたの方の狩猟は私の方の護身にはい  
り、私の方の狩猟は、さあ、狩猟前業はあなたの方の  
畜産ちくさんにでも入りますかな、まあとにかくその時々で  
ゆっくりご説明いたしましょう。」

この時ベルが又鳴りました。

がやがや物を言う声、それから「気をつけ」や「番



号」や「右向け右」や「前へ進め」で狐の生徒は一学級ずつだんだん教室に入ったらしいのです。

それからしばらくたって、どの教室もしいんとなりました。先生たちの太い声が聞えて来ました。

「さあではご案内を致しましょう。」狐の校長さんは賢かしこそうに口を尖とがらして笑いながら椅子いすから立ちあがりました。私はそれについて室へやを出しました。

「はじめに第一学年をご案内いたします。」

校長さんは「第一教室、第一学年、担任者、武井甲吉」と黒い塗札ぬりふだの下った、ばらの壁かべで囲まれた室に入りました。私もついて入りました。その先生は私の

まだあわなない方で実にしやれたなりをして頭の銀毛な  
どもごく高尚こうしようなドイツ刈がりに白のモオニングを着て  
教壇きょうだんに立っていました。もちろん教壇のうしろの茨いばら  
の壁には黒板もかかり、先生の前にはテーブルがあり、  
生徒はみなで十五人ばかり、きちんと白い机デスクにこし  
かけて、講義をきいて居おりました。私がすっかり入っ  
て立ったとき、先生は教壇を下りて私たちに礼をしま  
した。それから教壇にのぼって云いました。

「麻生あそう農学校の先生です。さあみんな立って。」

生徒の狐たちはみんなぱつと立ちあがりました。

「ご挨拶あいさつに麻生農学校の校歌を歌うのです。そら、一、

二、三、」先生は手を振りはじめました。生徒たちは高く高く私の学校の校歌を歌いはじめました。私は全くよろよろして泣き出そうとしました。誰だったれていきなり茨海狐ばらうみ小学校へ来て自分の学校の校歌を狐の生徒にうたわれて泣き出さないでいられるもんですか。それでも私はこらえてこらえて顔をしかめて泣くのを押おさえしました。嬉しかったよりはほんとうに辛つらかったです。校歌がすみ、先生は一寸挨拶して生徒を手まねで座すわらせ、鞭むちをとりました。

黒板には「最高の偽うそは正直なり。」と書いてあり、先生は説明をつづけました。

「そこで、元来偽というのは、いけないものです。いくら上手に偽をついてもだめなのです。賢い人がききますと、ちゃんと見わけがつかののです。それは賢い人たちは、その語のつりあいことばで、ほんとうかうそかすぐわかり、またその音ですぐわかり、それからそれを云うものの顔やかたちですぐわかります。ですからうそというものは、ほんの一時はうまいように思われることがあっても、必ずまもなくだめになるものです。

そこでこの格言の意味は、もしも誰かが一つこんな工合のうそをついて、こう云う工合にうまくやろうと考えるとします。そのときもしよくその云うことを自

分で繰り返し繰り返しして見ますと、いつの間にか、  
どうもこれでは向うにわかるようだ、もう少しこう云わ  
なくてはいけないというような気がするのです、そこ  
で云いようをすっかり改めて、又それを心の中で繰り  
返し繰り返しして見ます、やっぱりそれでもいけない  
ようだ、こうしよう、と考えます。それもやっぱりだ  
めなようだ、こうしようと思います。こんな工合にし  
て一生けん命考えて行きますと、とうとうしまいはほ  
んどうのことになってしまふのです。そんならそのほ  
んどうのことを云ったら、実際どうなるかと云うと、  
実はかえつてうまく偽をついたよりは、いいことにな

る、たとえすぐにはいけないことになったようでも、結局は、結局は、いいことになる。だからこの格言は又

『正直は最良の方便なり』とも云われます。』

先生は黒板へ向いて、前のにならべて今の格言を書きました。

生徒はみんなきちんと手を膝ひざにおいて耳を尖らせて聞いていましたが、この時一斉いっせいにペンをとって黒板の字を書きとりました。

校長は一寸私の顔を見ました。私がどんな風に、今の講義を感じたか、それを知りたいという様子でした

から、私は五六秒眼を瞑つていかにも感銘にたえない  
ということを示しました。

先生はみんなの書いてしまふ間、両手をせなかに  
しよつてじつとしていましたがみんながばたばた鉛筆  
を置いて先生の方を見始めますと、又講義をつづけま  
した。

「そこで今の『正直は最良の方便』という格言は、た  
だ私たちがうそをつかないのがいいというだけではな  
く、又丁度反対の応用もあるのです。それは人間が私  
たちに偽をつかないのも又最良の方便です。その一例  
を挙げますとわなです。わなにはいろいろありますけ

れども、一番こわいのは、いかにもわなのような形をしたわなです。それもごく仕掛しかけの下手なわなです。

これを人間の方から云いますと、わなにもいろいろあるけれども、一番狐のよく捕とれるわなは、昔むかしからの狐わなだ、いかにも狐を捕るのだぞというような格好をした、昔からの狐わなだと、斯こう云うわけです。正直は最良の方便、全くこの通りです。」

私は何だか修身にしても変だし頭がぐらぐらして来たのでしたが、この時さつき校長が修身と護身とが今学年から一科目になって、多分その方が結果がいろいろと云ったことを思い出して、ははあ、なるほどと、



うなずきました。

先生は

「武巢たけすさん、立つて校長室へ行つてわなの標本を運んで来て下さい。」と云いましたら、一番前の私の近くに居た赤いチョッキを着たかあいらしい狐の生徒が、

「はいっ。」と云つて、立つて、私たちに一寸挨拶し、それからす早く茨いばらの壁の出口から出て行きました。

先生はその間黙だまつて待つていました。生徒も黙つていました。空はその時白い雲で一杯いっぱいになり、太陽はその向うを銀の円鏡のようになって走り、風は吹ふいて来て、その緑いろの壁はどこどころゆれました。

武巢という子がまるで息をはあはあして入って来ました。さつき校長室のガラス戸棚とだなの中に入っていた、わなの標本を五つとも持って来たのです。それを先生の机の上に置いてしまうと、その子は席もどに戻り、先生はその一つを手にとりあげました。

「これはアメリカ製でホツクスキャツチャーと云います。ニツケル鍍金めっきでこんなにぴかぴか光っています。この環わの所へ足を入れるとピチンと環がしまつて、もうとれなくなるのです。もちろんこの器械は鎖くさりか何かで太い木にしばり付けてありますから、實際一遍いっぺん足をとられたらもうそれきりです。けれども誰たれだつて

こんなピカピカした変なものにわざと足を入れては見ないのです。」

狐の生徒たちはどつと笑いました。狐の校長さんも笑いました。狐の先生も笑いました。私も思わず笑いました。このわなの絵は外国でも日本でも種しゅびょう苗めい目録のおしまいあたりにはきつとついていて、然しかも効力もあるというのにどう云うわけか一寸不思議にも思いました。

この時校長さんは、かくしから時計を出して一寸見ました。そこで私は、これはもうだんだん時間がたつから、次の教室を案内しようかと云うのだらうと思っ

て、ちよつとからだを動かして見せました。校長さんはそこですつと室へやを出ました。私もついて出ました。

「第二教室、第二年級、担任、武池清二郎」とした黒塗りの板の下がった教室に入りました。先生はさつき運動場であつた人でした。生徒も立つて一ぺんに礼をしました。

先生はすぐ前からの続きを講義しました。

「そこで、澱粉でんぷんと脂肪しぼうと蛋白質たんぱくしつと、この成分の大事なことはよくおわかりになつたでしょう。

こんどはどんなたべものにも、この三つの成分がどんな工合ぐあいに入っているか、それを云います。凡そおよ、食物

の中で、滋養じように富みそしておいしく、また見掛けも大へん立派なものは鶏にわとりです。鶏は実際食物中の王と呼ばれる通りです。今鶏の肉の成分ぶんせきひようの分析表をあげましょう。みなさん帳面へ書いて下さい。

蛋白質は十八ポイント五パーセント、脂肪は九ポイント三パーセント、含水炭素がんすいたんそは一ポイント二パーセントもあるのです。鶏の肉はただこのように滋養に富むばかりでなく消化もたいへんいいのです。殊ことに若い鶏の肉ならば、もうほんとうに軟やわらかでおいしいことと云つたら、「先生は一寸唾ちよつとつばをのみました、」とてもお話ではわかりません。食べたことのある方はおわかりで

しよう。」

生徒はしばらくしんとしました。校長さんもじつと床を見つめて考えています。先生ははんけちを出して奇麗きれいに口のまわりを拭ふいてから又云いました。

「で一般に、この鶏の肉に限らず、鳥の肉には私たちが脳神経を養うに一番大事な燐りんがたくさんあるので。」

こんなことは女学校の家事の本に書いてあることだ、やっぱり仲々程度が高い、ばかにできないと私は思いました。先生は又つづけけます。

「その鶏の卵も大へんいいのです。成分は鶏の肉より

蛋白質は少し少く、脂肪は少し多いのです。これは病人もよく使います。それから次は油揚あぶらあげです。油揚は昔は大へん供給じゅうぐふんが充分じゅうぶんだったのですけれども、今はどうもそんなじやありません。それで、実はこれは廃すたれた食物であります。成分は蛋白質が二二パーセント、脂肪が十八ポイント七パーセント、含水炭素せいが零ゼロポイント九パーセントですが、これは只今ただいまではあんまり重要じやありません。油揚の代りに近頃ちかごろ盛さかんになったのは玉蜀黍とうもろこしです。これはけれども消化はあんまりよくありません。」

「時間じかんがも少しですから、次の教室きょうしつをご案内ご案内いたしま

しよう。」校長がそつと私にささやきました。そこで私はうなずき校長は先に立つて室へやを出ました。

「第三教室は向うの端はしになって居ります。」校長は云いながら廊下ろうかをどんどん戻りました。さっきの第一教室の横を通り玄関げんかんを越え校長室と教員室の横を通つたそこが第三教室で、「第三学年 担任者武原久助」と書いてありました。さっきの茶いろの毛のガサガサした先生の教室なのです。狩猟の時間です。

私たちが入って行つたとき、先生も生徒も立つて挨拶あいさつしました。それから講義が続きました。

「それで狩猟に、前業と本業と後業とあることはよく



わかつたらう。前業は養鶏ようけいを奨励しょうれいすること、本業はそれを捕ること、後業はそれを喰たべることと斯こうである。

前業の養鶏奨励の方法は、だんだん詳くわしく述べるつもりであるが、まあその模範もはんとして一例を示そう。

先頃せんころ私が茨窪ばらくぼの松林まつばやしを散歩していると、向うから一人の黒い小倉服を着た人間の生徒が、何か大へん考えながらやって来た。私はすぐにその生徒の考えていることがわかったので、いきなり前に飛び出した。

すると向うでは少しびびくりしたらしかつたので私はまず斯こう云った。

『おい、お前は私は何だか知ってるか。』

するとその生徒が云った。

『お前は狐きつねだろう。』

『そうだ。しかしお前は大へん何か考えて困っているだろう。』

『いいや、なんにも考えていない。』その生徒が云った。  
その返事が実は大へん私に気に入ったのだ。

『そんなら私はお前の考えていることをあてて見ようか。』

『いいや、いらぬ。』その生徒が云った。それが又大へん私の気に入った。

『お前は明後日あさっての学芸会で、何を云つたらいいか考えているだろう。』

『うん、実はそうだ。』

『そうか、そんなら教えてやろう。あさつてお前は養鶏の必要を云うがいい。百姓ひやくしやうの家には、こぼれて砂の入った麦や粟あわや、いらぬ菜葉さいはや何か、たくさんあるんだ。又甘藍キャベジや何かには、青むしもたかる。それをみんな鶏に食べさせる。鶏はおおよろこ大悦びでそれをたべる。卵もうむ。大へん得だと斯う云うがいい。』

私が云つたら、その生徒は大へん悦んで、厚く礼を述べて行つた。きつとあの生徒は学芸会でそれを云つ

たんだ。するとみんなは勿論もちろんと思つて早速養鶏をはじめめる。大きな鶏やひよっこや沢山たくさんできる。そこで我々は早速本業にとりかかると斯う云うのだ。」

私は実はこの話を聞いたとき、どうしてもおかしくしておかしくてたまりませんでした。その生徒というのは私の学校の二年生なのです。先頃せんころ学芸会があつたのですが、その時ちゃんと、狐あに遭つたことから何から、みんな話していたのです。ただおしまいが少し違つて居りました。それはその生徒の話では

「なんだお前は僕に養鶏をすすめて置いて自分がそれを捕ろうというのか。」と云つたら狐は頭をかかえて

一目散に遁げたというのでした。けれどもそれを私は口に出しては云いませんでした。この時丁度、向うで終業のベルが鳴りましたので、先生は、

「今日はここまですべてにして置きます。」と云つて礼をしました。私は校長について校長室に戻りました。校長は又私の茶碗ちやわんに紅茶をついで云いました。

「ご感想はいかがですか。」

私は答えました。

「正直を云いますと、実は何だか頭がもちやもちやしましたのです。」

校長は高く笑いました。

「アツハツハ。それはどなたもそう仰おっしゃいます。時に

今日は野原で何かいいものをお見付けですか。」

「ええ、火山弾かざんだんを見附みつけました。ごく不完全です。」

「一寸ちよつと拝見。」

私は仕方なく背囊はいのうからそれを出しました。校長は手にとつてしばらく見てから

「実にいい標本です。いかがです。一つ学校へご寄附きふを願えませんか。」と云うのです。私は仕方なく、

「ええ、よろしゅうございます。」と答えました。

校長はだまってそれをガラス戸棚とだなにしまいました。

私はもう頭がぐらぐらして居たたまらなくなり  
ました。

すると校長がいきなり、

「ではさよなら。」というのです。そこで私も

「これで失礼致します。」と云いながら急いで玄関を  
出ました。それから走り出しました。

狐の生徒たちが、わあわあ叫び、先生たちのそれを  
とめる太い声はつきり後ろで聞えました。私は走っ  
て走って、茨海ぼらうみの野原のいつも行くあたりまで出まし  
た。それからやつと落ち着いて、ゆっくり歩いてうち  
へ帰ったのです。

で結局のところ、茨海狐小学校では、一体どういう教育方針だか、一向さっぱりわかりません。

正直のところわからないのです。



底本…「注文の多い料理店」新潮文庫、新潮社

1990（平成2）年5月25日発行

1997（平成9）年5月10日17刷

底本の親本…「新修宮沢賢治全集 第九巻」筑摩書房

1979（昭和54）年7月

入力…土屋隆

校正：noriko saito

2006年11月26日作成

2009年7月24日修正

青空文庫作成ファイル…

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。